

探訪 北の風景 32

トドワラと幻の花街キラク 根室管内別海町・野付半島

青木和弘

立ち枯れした無数のトドマツが白い木肌を剥き出しに林立し、根もとには太い幹がよじれるように横たわっている。そんな風景が一面に広がっているのが私の記憶にあるトドワラだった。いま、そこは明るい干潟に変わりつつある。

昔、野付半島にはトドマツやアカエゾマツ、ミズナラなどの豊かな森林があった。しかし、地殻変動による急激な地盤沈下は年1.5センチにも及び、過去90年間で133センチも沈降している。豊かな森も海水が根を洗い、塩害で立ち枯れした特異なトドワラの奇景をつくった。現在は少し西側にあるミズナラの森に立ち枯れの「ナラワラ」

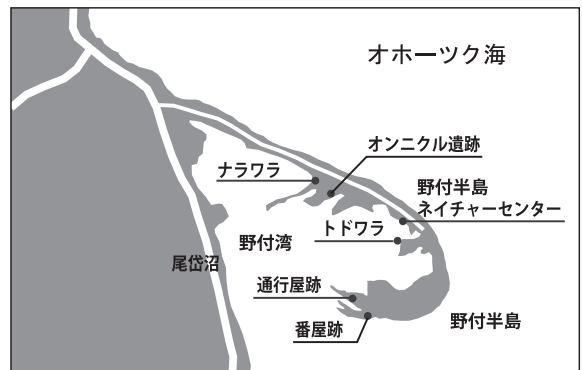
を望むことができる。

野付半島は北海道の東、知床半島と根室半島の間に延びる全長26キロメートルに及ぶ日本最大の砂嘴である。半島の付け根あたりは根室管内標津町だが、その先の大半は同管内別海町の行政区域になる。砂嘴に囲まれた野付湾内には干潟やアマモ場が分布し、多様な甲殻類や貝類が棲息する。オオハクチョウやコクガンなど渡り鳥の飛来が多く、冬にはオオワシやオジロワシも集まってくる。ここはラムサール条約の登録湿地でもある。

野付湾の内陸側に野付漁協が拠点にする尾岱沼漁港がある。初夏と秋に行われる打瀬船の北海シマエビ漁が、のどかな風物詩として知られるが、ホタテやサケ漁も盛んだ。

昔、野付の先端に「キラク」といわれる歓楽街があり、遊女もいた、鍛冶屋もあった。きらびやかな明かりが尾岱沼からも見渡せた——という言い伝えがある。それを最初に確認しようとしたのが北海道大学探検部らしい。1963年に、当時は発見されていなかった野付通行屋跡遺跡の周辺で敷石を確認。皿の破片や土瓶などを採集し「想像以上の大集落が存在したのではないか」と記録を残している。

江戸幕府が1799年（寛政11年）、国後島に渡る際の舟の中継地点として半島の先端の野付湾側に通行屋を開設し、武士やアイヌ民族が詰めて



いた。行政機能に加え、舟の風待ちをすための宿や、蔵、炊き出し場などがあつたという。アイヌ語通訳として活躍した加賀伝蔵（1804〜74年）が支配人を務め、その詳細な記録を、加賀家文書として残していた。

その文書が別海町に提供され、町は「加賀家文書館」をつくり、文書の解読と研究にあたっている。それによると、当時、半島の先端の野付湾側に、通行屋や蔵などがあり、外海側に番屋などが60軒ほど立ち並んで繁栄していたという。

2003年から05年にかけて別海町による発掘調査が行われ、建物2棟と貝塚を発見し、金属製品や木製品など14000点が出土している。未調査部分には畑と見られる細い畝跡もあり、文献によると、大麦や大根、ニンジンなどを栽培していたらしい。土葬の跡と見られるくぼみ75カ所と4つの墓石も確認している。ここにはロシアの南下政策に備え、会津藩の陣屋も置かれていたが、戊辰戦争が始まると会津藩士は引き揚げ、間もな



150年前からトドマツやアカエゾマツの森林があったが、地盤沈下による塩害で立ち枯れし、いまでは平坦な湿地や干潟になってしまった野付半島の先端部分。トドワラの面積もわずかになってしまった



「ナラワラ」は立ち枯れするミズナラの森。隣接するオンニクルの森には擦文時代（6～13世紀）の竪穴住居跡が100カ所あまり見つかっている

く集落は姿を消したのだという。
 「現在、通行屋跡から海岸線まではわずか20×30メートルだが、10年ほど前は80メートル近く離れていた。通行屋跡から500×600メートルほど先にある番屋跡も普段は海に沈み、干潮時だけ現れる。建築物や土塁などの痕跡は残っておらず、波打ち際に食器のかけらが散らばるだけだ」と「北海道新聞朝刊（釧路・根室版）」（2016年5月30日付）が最近の様子を伝えている。
 花街があったのかどうかは分からないが、通行屋跡などの遺跡は地盤沈下とともに消えゆく運命にある。この集落にどんな暮らしがあり、どんな人生があったのか、「キラク伝説」は野付の旅を魅力的な空想で膨らませてくれた。